

---

# 「オレ様、殺人事件。」

CASIO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「オレ様、殺人事件。」

### 【Nコード】

N5055D

### 【作者名】

CASIO

### 【あらすじ】

いつまでたっても出世が出来ない刑事、物知圭二は、靈感を持っているせいで、事件の犯人に殺され幽体離脱してしまった少年、有沢啓人と出会う。啓人は殺されたにも関わらず、犯人の顔を覚えていないらしく……。アンバランスなコンビが織りなす、爆笑ミステリー。

## 出会い

### ケイジのファイル

このファイルに記されている事は完全にノンフィクションであり、実際の団体やら人物やらとはかなり関りがある。

これは、俺とある少年との出会いによる記録だ。まあ、読みたいと思うなら

読めばいい。だが、なるべく他言無用であることを願いたい。

ピーポーピーポー、、、

サイレンの音がけたたましい程に響く。

特に仕事を頼まれる訳でもなく、かと言って、そんなに忙しくなかった俺は、

現場近くの公園のベンチで、コーヒーをすすっていた。

「はあ、つたく連続殺人事件なんて、世の中物騒になったもんだよなあ。

まあ、事件がないと飯が食えなくなるのは俺たちなんだけど・・・。

うるせえなあ、サイレンと幽霊の音が混じって頭痛てえ」

俺は物知圭<sup>ものしりけいじ</sup>。ケイジだ。いや、名前を連続して言っただけじゃない。

けっして、物知りなわけでもないし、ニコラス・ケイジでもない。

そして、その俺が特技とする物、それは「幽霊」が見える。

物心ついた頃からは、もう見えていた。だから怖くはない。

その時の俺は、まさかこの能力が役に立つとは思ってもみなかった。

「こら、ニコラス君。仕事さぼってちゃ給料減らすぞ。」

ただでも皆忙しいって言うのに、コーヒーなんてのん気に飲むじゃない！」

「だって俺には何もやる事がないっすからねえ。」

・・・香山先輩、ニコラスって呼ばないで下さい」

この人は香山瑞希先輩。俺の上司だ。とても気が利くし、頭も良いし、

その上超絶の美人だ。 ああ、今日も見目麗しい。

「仕事はあるよ。 今すぐに、事件に巻き込まれたと思われる

16歳の高校生の襲われた現場を見に行ってくれない？」

こうして俺は、先輩に促されるままに、車を動かした。

現場はマンションから10分くらいの所にあつた。 おそらく通学路だろう。

そこにも、たくさんの野次馬と警察がたかっていた。

「こんなとこに来て、一体何をしているのやら・・・」

事情聴取も面倒くさいし、推測できるほどの頭を持つてるわけでもないしなあ

・・・あれ、どうかで見たことのある顔だ」

と言つても、幽霊だ。 何故かしよぼしよぼと歩いている。

「君、どうかしたの？ 何か未練が残つてるのか？」

そう呼びかけると、少年はびっくりしたようにこっちを振り向い

た。

「…………おっさん、俺が見えるのか!!??」

「お、おっさん……………」

それが少年、有沢啓人との出会いだった。

## ケイトの日記

これは俺様が高校生になってちょっとしたくらいに起こった、ある事件の話だ。

言っとくけど、高校生の書く日記なんて、「中学生日記」くらいの程度しか

思ってなかるう。　　だけどこれは違う、本物の事件だ。　　実際にこんな事件が、

周りに起こっている事をよく知って欲しいから俺は書いている。

…………コホン、そんなに堅苦しくなくていいから、俺様の日記を読め。

その日の俺様はいつもと変わらない日常を送っていた。

一つ、変わった所と言えば、親父が珍しくニュースを見ていた事、それだけだ。

「連続殺人事件なんて物騒だなあ。おい、啓人、せいぜい殺されなように」

「ちやーんと家に帰って来いよ!!!!!!」

「ったく、ありえねー事言っんじゃねえよ。 . . . 行つて来るからな。」

「いつてらっしやい^^」母さんが笑顔で見送った。

俺の名前は有沢啓人。<sup>ありさわけいと</sup>冒頭で触れたが、高校一年生だ。

成績はそこそこ、顔は美形、運動神経抜群、まあ、自信家のせいで性格は悪いと称されているが、それも愛嬌の内として友達も居る。

普通に授業をして、普通に仲間で騒いでいた、ごく平凡の毎日。だが、そんな普通の帰り道に、突然悲劇は訪れた。

俺様、有沢啓人は殺されたのだ。

ありえないくらいの速さでありえないくらいの痛みが俺を貫いた。何、誰にやられただ？ 朝、ニユースでやっていた、連続殺人犯にだ。

やたらと硬い何かで殴られた。髪を触ると手にはベツトリと血が付いていて、眩暈がする。

そんな霞みゆく意識の中、俺は殴った張本人の顔を見ようと必死に目を開けた。

「 . . . . . お、男 . . . . . ? . . . . . 」そのまま、かくん、とうなだれた。

ピーポーピーポー

薄い意識の中、サイレンのような音で起こされた。起き上がると信

じられないくらいに体が軽い。

何故だろう。　そして、また疑問が一つ。　なんと人だかりが、俺様を囲んでいるのだ。

その中には警察官も数人居て、野次馬達を取り押さえている。

ありえない、倒れているのにしてみれば、ありえなすぎる。そして、数秒してからその謎は解けた。

「俺は既に「死んでいる」のだっ  
た。

立ち上がった俺の足元には、頭を殴られ、血を流して倒れている「俺の死体」が転がっていた。  
そして今、立っている自分自身の手を見つめてみた。

「はは、はははは・・・なんかコレ、透き通ってねえか?・・・」

俗に言うアレだアレ。　なんだっけな。「ゆ」から始まる言葉だよ。  
って、まさかのまさか、

「これって、、幽体離脱うー!ー!  
!?!?!?」

その後、俺様なりに元の体に戻ろうとするが、水を片手で掴むかの  
ように、何も変化はなかった。

おまけに、自分の体は意識不明の重態として救急車に運ばれ、持っ  
ていかれる始末。

父さんや母さんも、心配してるだろう。まさか本当に死ぬとは思っ  
てもみなかったのだ。

あんなに忠告してくれたのに・・・（冗談ぽかったが）。

「もう、何していいのかわかんねー……」うつむいた瞬間だった。

「あれ。君、ここで殺された少年？」 人の良さそうな男が俺に話し掛けてきた。

「おっさん、お、俺が見えるのか!？」

「お、おっさんって……酷いなあ……」

それが、刑事のケイジさんとの出会いだった。

## ケイジのファイル

どうやら殺された少年は、幽体離脱をしているようで、ここで話しかけたら、俺が一人でぶつぶつ言っている、頭のおかしな奴だと思われる可能性が高いので、俺は少年に「ちょっと場所を変えようか」と、呟いた。

「で、もう一回だけ聞くけどさ……」

俺が少年を連れて行った場所は、現在俺が住んでいるぼろっちいアパートだった。

……ここなら誰にも話を聞かれやしまい。

「なんで啓人君は何にも覚えてないの!! 仮にも自分が殺されたんだよ？」



覚えてないわけじゃないか！！！」

なんと、事情聴取をするにも、少年は何も覚えてないと言うのだ。これでは場所を変えた意味が無いじゃないか。

少年の名前は有沢啓人。高校生。学校の帰宅途中に犯人に襲われたらしい。

「だってよ、圭二さん。記憶が吹っ飛ぶくらい殴られたんだぜ？  
こう、俺様の綺麗な顔をガツンと・・・」

・・・どうやらナルシストみたいだ。

「ああ、思い出した！！！」

「な、何を！？！？」

「男だった」

けいと君がそう言った瞬間、俺はがくんとうなだれた。

「男ぐらいいくらでもいるだろ・・・」

「大体さ、何でけいじさんはそんなに真剣なんだよー」

不機嫌そうに質問するけいと君に、俺は真剣に言った。

「そりゃ、連続殺人事件だぞ。これを俺一人で解決したら、大手柄じゃないか」

「何でけいじさんの私利私欲の為に、俺様が悩まなくちゃいけないんだよ」

理不尽じゃないかと、ブーイングをするけいと君に、俺は言った。

「じゃあさ、俺はお前が本当の体に戻るまで、ずっと協力する」

「ふーん、で？」

「その代わり、啓人君は、俺が事件解決に至るまで、隅々まで協力するってわけだ」

けいと君は、しばらく悩むそぶりを見せると、真剣に俺の方を向いた。

「分かった。それで行こう。どうせこのままじゃ、体に戻れないのがおちだからな。」

「はは、俺様の推理力をなめんじゃねーよ!」

こうして俺、物知圭二は、有沢啓人と共同戦線を張る事になったのである。

## 出会い（後書き）

初めての投稿となります。

題名の通り、一人称が「俺様」である、啓人が殺されたので「オレ様、殺人事件。」ってわけです。  
感想よろしく願いします^^。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5055d/>

---

「オレ様、殺人事件。」

2010年10月9日00時39分発行